

2020年1月22日(水)

老球の細道520号

シューズの進化は競技力の向上に是か非か？

会津バスケットボール協会 室井 富仁

1960年ローマ五輪マラソン競技でエチオピアのアベベ・ビキラは裸足で走り金メダルを獲得した。その後バスケットボール界でも、私が中学校1年だっただろうか、浪江町の請戸中学校女子が全員裸足でプレイして当時の県中体連大会で優勝した。優勝して笑顔の「歯出し」ではない。バスケットボールシューズなどまだなかった時代の話である。

私が高校になってからアシックスの前身「オニツカタイガー」が布バッシュの「ファブレ」を発売し本格的なバッシュ時代となる。その後レザーシューズの時代が到来し現在のシューズ戦国時代となる。そんな日本のバスケットシューズ歴史の中で、アシックスがまだ「オニツカタイガー」時代に、スポーツシューズのノウハウをアメリカから学びに来た若者がいた。現在のナイキ社長フィル・ナイトである。その後フィル・ナイトはオニツカから技術者をヘッド・ハンティングして現在のナイキ王国を作り上げたのは有名な話である。

フィル・ナイトはマイケルジョーダンをモデルにバスケットボールシューズ界に旋風を起し、バスケットボールを世界NO1のスポーツに育てた「4人の功労者」の一人に称えられている。そのナイキ社が開発し、世界の陸上の長距離界を席卷するナイキの厚底シューズが規制されるかもしれないというニュースが現在話題になっている。

このシューズはナイキ社の「ズームエックス ヴェイバーフライ ネクスト%」(定価3万250円税込み)で、反発力のあるカーボンファイバー(炭素繊維)の板を中に挟み込み、クッション性と足を前に押し出す働きを両立させているという。今年の箱根駅伝の上位3チームの大学の選手は全員使用し、1～9区の区間賞に輝いた選手も全員が履いていた。2017年に「厚さは速さだ」「速さは誠意だ」(私のコピー)のキャッチコピーで売り出しが始まり、試作品は2016年のリオ五輪でマラソン男女メダル6個中5個を獲得し、2017年にはボストンマラソンの表彰台を独占したという。このシューズを履く日本のトッププランナーは「足を地面におくだけで前に進む感じがする」というコメントをしている。

こんなに良いシューズがなぜ規制されそうなのか。世界陸連の規定では、レースで使用する靴は「誰でも求めやすい」が原則。特殊な素材で大量生産は難しいとされ、一部だけが使えるのは不公平として、規制を望む声があるようだ。他の競技では、過去には水泳水着の「レーザレーサー」やゴルフの「高反発ドライバー」の禁止などがある。

「用具の進歩に過度に頼りすぎることを抑え、プレイヤーの技量が主要な要素であることを確保する」という考え方もあるが、メーカーはアスリートが願う「より速く、より高く」を実現しようと商品を開発する。企業間の開発努力を否定しない丁寧なルール作りが大切になる。が、東京五輪直前での規制は、靴の変更で走り方にも影響が出るのではないか。

バスケットボールシューズで10cm以上ジャンプ力が向上する商品が現れたらどうか？